

電子情報通信学会への夢

企画理事 大石進一



本年10月1日に新英文論文誌 *Nonlinear Theory and Its Applications*, IEICE が出版されました。編集委員の2/3を海外の研究者が占め、非線形分野の最新研究成果が広く出版される仕組みが作られています。一方、国際会議では *International Symposium on Nonlinear Theory and Its Applications* (NOLTA Symposium) が毎年開催され、その20回記念 Symposium もポーランドのクラクフで9月に開催されました。IEEEには非線形理論を広く対象とするソサイエティがないために、工学、理学、数学を中心とした幅広い非線形関係の研究者の交流する場として、世界の研究者の間に定着したシンポジウムとなっています。基礎・境界ソサイエティには将来のソサイエティを目指すサブソサイエティがありますが、新英文論文誌と国際会議を擁する非線形理論とその応用サブソサイエティはその資格が徐々に蓄えられていると感じています。

このように基礎の研究部分も大切に育てる風土が、本学会にはあると感じています。「自分のやりたいことをやる場が学会である」と思いますが、いろいろな「やりたいこと」を支えるだけの場を本学会が提供している証左が新論文誌の発行に象徴されているのではないのでしょうか。若い会員の皆さんがICTを中心として、深い基礎から先端応用まで、「やりたいこと」があったら、「やれる仕組み」を作る場として、ぜひ本学会を考えて頂ければと思います。NOLTA Symposiumを作った理由の一つは、修士や博士学生を中心とした若い研究者の卵に、気楽に海外の仲間を作る場を提供したいということが目的でした。その意味では大変成功しました。

もう一方では、NOLTA Symposiumのような並列セッションの大きなシンポジウムではなくて、一つの分野の専門家を世界から集めたワークショップを開催したいということを考えてきました。シングルセッションで全部の講演を参加者全員が聞いて、そのワークショップの中で研究上の飛躍がもたらされるようなものが目標です。ヨーロッパにはそのようなワークショップを開催できるコミュニティがあり、各国持ち回りでワークショップが開催されます。あるいは、そのような場を提供する研究施設がありサポートを受けることができます。例えば情報系ではドイツのDagstuhlセミナーは著名です。世界から30~40名程度の先端研究者が集まり、月曜日から金曜日まで一週間にわたって合宿して研究成果を報告し合い、共同研究の芽を育てます。そのようなコミュニティを作ることに寄与できる仕組みができないかと考え続けてきました。例えば、年に1回は海外の大学で研究会を開催するのいいのではないかと考えています。昔、研究会は機械振興会館で開催するのが普通でしたが、いつからか日本中で開催されるようになりました。今は、日本中の研究者は皆知り合いになっているという状況だと思います。それを東南アジアやヨーロッパなどで行ってはどうでしょうか。もちろん、アメリカ大陸でも。そうすると、自分の専門分野なら世界中の研究者と知己であるという状態がだれでも実現できるようになると思います。